

遊歩道（フットパス）を利用するイギリス田園風景の楽しみ

岩間 貴之（町田市都市緑政部）

1. はじめに

町田市北部の多摩丘陵には、丘陵地特有のアンデューレーション（緩やかな起伏）を基調とする景観を基盤として、複雑に入り込む谷戸地形やその谷戸から供給される水系、斜面には田畑があり、土手があり、谷戸を囲む雑木林があるなど、多様な生態系と共に田園風景が広がっている。こうした田園風景は、この地域の人々の、長い歴史にわたる、伝統的かつ変化する社会環境に適応した生活様式を通じた自然環境への働きかけによって形成されたものである。故に、それに親しむほどに、私たちに深い感動を与えてくれるものである。

イギリスでは、ロンドン等の都市から少し離れば、すぐに丘陵地の緩やかな起伏を基調とした美しい田園風景に囲まれることができる。その田園地域（カントリーサイド）へのアクセスは非常によく、その中には遊歩道（フットパス）や案内所（ビジターセンター）が整備されて、都市住民の身近なレクリエーションの場として活発に利用されている。また、田園地域の住民側もこうした利用客を相手にしたレストランや宿泊施設、別荘付き貸し農園などを経営するなど、新たな産業が生まれている。

2. イギリス田園風景と遊歩道（フットパス）

イギリスの田園地域には、畑作・酪農・羊毛などの広大な農地が広がっている。本当に美しい田園風景である。整然とした農地も、曲がりくねった石壁や生垣も、実用性を追求した上に作られたものだが、同時に、人々の目を楽しませている。農地の中にはパッチワーク状に雑木林や農地を囲む垣根（ヘッジロウ）が残されている。この生垣や石垣は、土地の囲い込みの遺産だが、田園地域の景観の質を高めると共に、野生生物のすみかともなっている。また、雑木林は、地域の人々の燃料や手工芸の材料を供給してきた。

イギリス田園地域において、ネットワーク化されている遊歩道（フットパス）の利用は、宿泊を伴う長距離旅行や日帰り旅行だけでなく、日常の散歩はもとより、通勤、通学、買い物など、地域の生活に密着して

利用されている。そして、フットパスを歩くことで、変化する美しい田園風景の鑑賞を楽しむことができる。

3. フットパス成立の背景

イギリスでは、近代農業革命が17世紀から19世紀にかけて貴族や豪農などの土地所有者により、土地の囲い込み（エンクロージャー）によって行われた。主として、農業経営の拡大を求めて、コモンズや荒地を囲い込み、そこでの農民の利用と権利を排除しようとしたのである。19世紀になって、レクリエーションなどの側面から、こうした土地への立ち入り権を主張する運動がイギリス各地で起こり、そうした運動は20世紀にかけて、益々盛んになっていった。1932年にこうした土地への通行権法である「歩く権利法」が成立、さらに戦後の1949年の国立公園の成立と共に、「国立公園・田園地域アクセス法」が成立した。これは、国立公園や優れた自然美の地域指定と、田園への立ち入り（通行）を行政（議会）が保障するものである。通行権の不明瞭なものは、行政により「公道図」が作製され、行政と土地所有者とが立ち入り協定と利用者の行為を指導する憲章（カントリーコード）の作成などがなされた。このようにして、フットパスが整備されていったのである。

4. フットパスと景観鑑賞

イギリスの田園地域を歩いていると、よく「パブリックフットパス」の標識をみかける。この標識は、「歩く権利」をもつ歩行道を意味している。フットパスは、舗装されていない自然の、耕地や牧場での畦（あぜ）道であり、森や川沿いの小径である。駐車場などの拠点から30分程度で一周できるものから、宿泊施設を利用して、国土を縦断する長距離歩道まで様々なフットパスが国中に整備され、よく利用されている。その距離、約14万キロである。利用者は、そのプロセスにしたがって連続して変化していく景観体験（シークエンス景観）として、その風景を鑑賞しているのである。これは、主要な展望台などからの眺め（パノラマ景観）に重きをおく、我が国の景観鑑賞法とやや異なってい

る。その過程を重視すれば、必然的にフットパスが重要になってくるのである。

5. フットパスの利用と保全・活用

フットパスがネットワークされる田園地域の拠点地域には、ビジターセンターが整備されている。その役割は、田園地域のレクリエーション利用のための様々な情報提供やコミュニケーションの場として位置付けられている。また、周辺の自然環境の解説や利用に関する情報を提供するほかに、フットパスの記された地形図や図書やグッズなどの販売が行なわれている。グッズなどの質や種類の豊富さは利用者の要求を満たすに足りるものである。また、レストランや駐車場も併設されているものもある。湖水地方にあるビジターセンターは、昔の農家を殆んどそのままの形で利用しており、周辺風景との調和がとれた建築物として評価したものである。

宿泊施設が充実しているのも1つの特徴である。B & B (ベッドアンドブレイクファスト) と呼ばれる、宿泊と朝食を提供してくれる宿泊施設が数多くあり、日本でいえば民宿といった感じのものだが、窓の外は田園風景を眺めながら食べるイングリッシュブレイクファスト(英国流の朝食)は格別のものである。これら宿泊施設では、現地での詳細な各種情報の提供を受けることができる。宿泊施設が充実していることで、長期間にわたるレクリエーション利用が可能となっている。

フットパスに関する直接的な施設として、道標や管理者を明示するサインの存在が欠かせない。このサインは、田園地域の至る所で見受けられる。その殆どは、木製で作られたもので、「人の歩く道」や「馬の歩く道」や管理者を明示している。

フットパスの維持管理に関しては、地方自治体の協力のほかに、土地所有者への助成やBTCV (British Trust for Conservation Volunteers、英国環境保全ボランティアトラスト) 等へのボランティア組織に対する委託が行なわれている。また、フットパスを中心に、散策のためのイベントやコースガイドについての情報などを提供している。

ランブラーズ協会(以下、協会)では、散策を通じて田園地域の景観を保全するという理念を持って活動している。協会では、各種リーフレットや公道図等の散策関連資料の販売の他に、全国の会員や作業ボラン

ティアが常にフットパスを観察し、課題や問題点を報告している。

6. イギリス人の生活様式と風景観

イギリスの田園地域を歩いていて印象深いのは、その美しい風景と共に、その風景を創り出したイギリス人の美意識を感じ取ることが出来ることである。例えば、「少しでも美意識がある人ならば、木は伐らないだろう」と、道沿いに立つた一本のブナの木を見て言った、土地所有者の言葉が心に響く。生活や生業を通して形成されたイギリス田園地域の風景は、イギリス国民の美意識によって創られ、そして守られているのである。

今でも、中層以上の多くのロンドンに住むイギリス人は、定年後は、カントリーサイド、少なくともロンドン郊外の田園に住むことを夢見ているそうである。ここで、忘れてならないのは、フットパスを通じて田園地域に立ち入る権利(アクセス権)やレクリエーション利用も、イギリスの人々が長い様々な歴史を経て、勝ち取った権利であるということである。そして、長い間のイギリス人の生活様式と風景観(づくり)の蓄積が、田園地域におけるきめの細かい景観づくりやレクリエーション利用を可能にしていることである。

7. おわりに

都市の人々の自然や歴史、風景への関心が益々深まるなか、多摩丘陵に守られている田園風景も、レクリエーションや景観といった視点からその保全に向けて新たな仕組みや位置付けを探ることが求められている。町田市内でも多摩丘陵の景観保全のためのNPO等の市民活動が展開されつつある。今後、市民活動の長い伝統のあるイギリスなどの事例を参考にしながら、仕組みづくりや新たなプログラムについて、市民活動を中心にして展開していくことが重要である。そして、まちづくりの中で、分かりやすい施策を展開しながら多様なレクリエーション資源を発見し活用を図ることである。市民による田園地域の保全活用の伝統づくりはまだまだ始まったばかりである。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたっては、東京農業大学麻生恵先生並びに栗田和弥先生に大変お世話になりました。また、両先生には、日頃より、町田市のまちづくりに対して、多くの貴重な示唆を頂いております。今回のテーマについて、更なる取り組み

を決意すると共に、ここに記して感謝の意を表したい
と思います。

参考文献

- 1) 麻生恵 (2001) : 市民による多摩丘陵遊歩道ネットワーク整備の意義と将来展望 (鶴川地域まちづくり市民の会講演会資料), つるかわまちだより第13号.
- 2) 平松紘 (1999) : イギリス緑の庶民物語, 明石書店, p.242.
- 3) 重松敏則・入倉彩 (1994) : イギリスの自然歩道システムとその運営管理について, 造園雑誌57(5), pp.325-330.
- 4) 中島恵理 (2000) : ヨーロッパの里地紀行, グリーンレター No.22, 公益信託富士フィルム・グリーンファンド, pp.18-20.
- 5) ビル・ブライソン : 英国カントリーの伝統美, NATIONAL GEOGRAPHIC 1998-12, pp.98-121.